にぎやかに再会を喜ぶ　亀田町福寿大学生
横越村高令者大学生が交歓会

亀田町福寿大学生と、横越村高令者大学生が去る七月二十六日、横越公民館において交歓会を行いました。

亀田から五十名、当村から七十八名参加されました。

山崎公民館長の歓迎のあいさつから始まり、横越、亀田の高令者代表からそれぞれあいさつをいただきました。つづいて村長、村教育委員長、教育長から、来賓としての祝辞をいただき、さっそく三つの分科会に別れて意見交換をしました。「これからの高令者の生き方と役割」と共通のテーマでしたが、ある人は生き方について次のようにまとめて話してくれました。

(一)健康増進管理と家族関係の調和と幸福。

(二)高令者間の助け合いと仲間づくり。

(三)趣味を生かして楽しい人生づくり。

(四)若い世代との交流を深める提携をはかる。

(五)奉仕活動に加わり社会との分科会を終ってから講堂で酒をくみかわし、横越の民踊クラブの踊りと歌でにぎやかに談笑していました。今年で二回目の交歓会ですが、来年もぜひやりたいということで再会を約束して日程を終了しました。

また、今回の交歓会のために、亀田町の高橋ひとしさんが手作りの国旗を寄贈して下さいました。寄贈しようとした心境についての手記も寄せてくれましたので次に記載しました。

（早通　高橋ひとし）

公民館長に国旗を送る高橋さん

高橋さんの手記

私は亀田町の西の端、早通りの部落に住む七十三才の老婆でございます。このたび、老人大学の横越と亀田の話合いの会に出席させて戴きまして誠に光栄に存じます。会長様や、役員の皆様の同意をいただき、国旗をおみやげに持ってまいりました。出過ぎた事と思いましたが、町の各学校や公共施設に大分私の手造りの旗が寄贈されておりますので、横越にも送ることにしました。（中略）川根谷内は母の故里でありますと同時に私にとりましても、第二の故郷の様なものでございます。少女の頃、あの長い笊木原を通り母の実家へ参りました。今でも楽しい思い出でありま す。（中略）母は私の十七才の秋、年若くして亡くなりました。私は高等小学校を出ると、母から仕立物を教り、それに助けられて参りました。（中略）母から教えられた仕立物のお土産をこうして母の故里に持って来られた事を何よりも嬉しく思います。

（早通　高橋ひとし）

明日の地域作りのために
新田（横越中）子供会リーダー研修開催

子ども会の中心となって活躍出来るよう に」との目的で七月九日、十日公民館に於て一泊二日の日程で研修会を開催した。

第一日は定刻に開会式を行い、神田隆吉会長の挨拶。山崎公民館長の激励挨拶などのあと、屋上で「子ども会旗」を掲げ、引続き学習に移り、中野社体指導員を講師に「レクリエーションの持ち方」について講義と実技指導がありこのあと神田主事から「子ども会活動の進め方」で講義がなされた。夕食準備は女子が受持ち、御飯たきからカレーづくりを賑やかに、男子は浴室の清掃、食卓の準備など作業分担して夕食が始まった。

「少々コワゴワした御飯も多数での会食で、二杯三杯と追加する程の楽しい食事風景であった。」

食後、映写会に移り「練習船日本丸」「絵伝日本の船」を鑑賞（日本海事広報協会の提供）し第一日を終えた。

第二日は早朝マラソンをし朝食後、増渕分館主事から、①リーダーの重要性。②リーダーの心がまえ等、リーダーとしての全般について話を聞き、前夜の映画について感想文を記録した。

昼食後、プールに於て「水泳教室」が開かれ、①バタ足の基本。②クロール。③平泳等の実習があり、館内整備等のあと閉会式をもって第三回の研修会を終了した。

夕食準備始まる

PTA活動を考える
研究集会開催
加藤　守氏（横越下）が事例発表

今日、子どもをすこやかに育てるために、家庭、学校、社会のいずれの場においてもそれぞれ適切な指導と三者のゆるぎない協力がどうしても必要です。それだけに、家庭学校、社会の三者の接点に立つPTAに対する期待も大きく、又時代の要請にこたえるためにPTAの望ましいあり方が要求されています。

これらPTA活動を考える「昭和五十二年度三市中持ち場研究集会」が去る七月十六日亀田町民会館で開催されました。研究主題に「子どもの望ましい成長のために、PTAは実践活動をどのように進めたらよいか」ということで、五ツの分科会に別れ話合いが行なわれました。当村から第一分科会に出席された加藤守（横越下）さんは、「会員に魅力ある活動を組織し、運営するには、どのようにしたらよいか」と、いうテーマで次のような発表をされました。要約してお知らせします。

一、PTAの真の理解なくして、PTAの維持発展は望めないのではないか。そこでPTA役員に最少限度の活動について説明し、会員の志気の高揚をはかってほしい。

二、各機関が有機的に協力し活動する。地域、学年、専門部、全体等のPTAのつながりが大切だと思います。

三、PTA活動の〝実〟はPTA活動を考えるPTA研究集会」が去る七月十六日亀田町民会館で開催されました。研究主題に「子どもの望ましい成長のために、PTAは実践活動をどのように進めたらよいか」ということで、五ツの分科会に別れ話合いが行なわれました。当村から第一分科会に出席された加藤守（横越下）さんは、「会員に魅力ある活動を組織し、運営するには、どのようにしたらよいか」と、いうテーマで次のような発表をされました。要約してお知らせします。

一、PTAの真の理解なくして、PTAの維持発展は望めないのではないか。そこでPTA役員に最少限度の活動について説明し、会員の志気の高揚をはかってほしい。

二、各機関が有機的に協力し活動する。地域、学年、専門部、全体等のPTAのつながりが大切だと思います。

三、PTA活動の〝実〟は必ず子供に還元される、いくらいそがしくとも、自分の子供に還元される事を自覚してほしい。まず役員が、勇気と自信を持って、お互に持ち場親が、この子がいると家庭や兄弟や又社会にもめいわくがかかる。ひと思いに万代橋から信濃野川へ飛びこもう、こう思いたって橋の上まで来たもうこの子の顔もこれが最後かと思い、背に負れた子の顔に目をやった。子はなんの心配もなさそうにすやすやとまるで笑っているようにねむっている。

そしたらとても飛びこむ気になれなかった。この子のため、どうしてもっと生きなければ、とまるできちがいのように泣きじゃくりながら自分の家まで走ってきた母の話などされ、聞きいる人に深い感銘を与えました。

横越から八名位の出席でしたが、来年からより多くの人が参加してほしいと思っています。

必ず還元されてほしいとも、自分の子供に還元される事を自覚してほしい。まず役員が、勇気と自信を持って、お互に持ち場持ち場で地道な活動を展開しなければならないと思います し、この地道な牛歩の歩みでも、いつか大きく千百の道につながるものと確信します。

もう一度、私もあなたも大いに理解し、みんなで考え、みんなで実行しましょう。これからはお互に啓蒙し、努力しなければならないと思います。

分科会終了後、全体指導で下越教育事務所社会教育課長仲川氏が次の話をされた。

PTA活動の事例の一つに水原町が、住民と業者の協力によって維誰の自動販売機を撤収したこと、これはPTAの実践活動に結びついたものである。どうか、PTAはこれから、学校と家庭のパイプ役をはたしてほしいということでした。

発表する加藤さん

スタミナ料理
あじの野菜あんかけ

材料＜4人前＞
あじ…4尾　にんじん…1本
もやし…200g　しょうが…1かけ
合せ調味料（しょうゆ大5、砂糖大さじ4、酢大さじ2、塩小さじ1）

作り方

①あじはぜいご、えら、わたを取り、水洗いをして水けをふきとる。

②にんじん、しょうがはせん切りにし、もやしは洗って水けを切る。

③①に小麦粉をまぶし、170度に熱した油で中まで火が通るよう充分に揚げる。

④なべを熱して油大さじ三杯を入れ、しょうが、にんじん、もやしの順に強火で手早くいため、合せ調味料をを回しかけ、かたくり粉大さじ2を水で溶いて回し入れ、とろみをつける。

⑤器に③を盛り、④をかける。

横中女子バスケット
宿願の全国大会出場決る
八月十七日から宇都宮市で

第七回信越中学校バスケットボール大会は七月三十一日長野市立城山小学校体育館で行なわれた。四十六年の第一回大会で男子が一点差に泣いて七年目、過去三度の挑戦はいずれも快勝で惜敗している全国大会出場に夢をかけ雌伏七年、遂にやった の実感である。七月二十五日から地区大会に出場（佐渡）二十七日に帰校、全国大会県予選会が二十九日長岡で（二十八日に出発して宿泊）行なわれ三十日に長野について三十一日の大会、まさに過酷とも思われるハードスケジュールの中で、体調をくずす選手も少なくなかった。

長野入りした三十日に一時間ばかりの練習で、やっと本来の力を出しはじめた、信越一回戦は64対31と大差で屠代中に快勝。後半は二年生を出場させて主力を休養させた。選手の顔にも余裕すら見られるようになった。約一時間半の休みのあとの決戦は、気力がみなぎっていた。一七二㎝の女島羽中のセンターとのジャンプは負けてもボールはやりとした、五月末体調のすぐれなかった、坂井もよく走りよくとんだ。リバウンドボールも負けなかった。一年生からのレギュラー坂井と、昨年のスタメンの一人武藤もよく走った。早いドリブルからのカットインプレイも実に良かった。石塚チビの名リードマンぶりは、ひときは光った。牛歩の中川も、今にも倒れそうな遠藤も、そして二年生山崎は腰痛を訴え乍らもよくやった。実に十二名の選手を交互にコートを走らせこの全国大会出場権獲得であった。横越に赴任して十一年目、第一の悲願はここに成った。涙腺は、押えがきかなかった。選手とともに泣いた。（佐々知）

読書感想文
地図にない島
木津坪谷フク（井上靖作）

この小説は大家渋介、多加子の新婚旅行からはじまっている。ふとした渋介の行動から不安を感じた多加子は一人逃げかへってしまうのである多加子は女性特有の勘や感性に依る理想の愛を追い求めよう とするが、恋愛感情とは別のものなのである。

また渋介は訪れた亜紀子と酒の勢いで、肉体関係を結ぶことがあり、急遽に傾く亜紀子への愛を訴へる渋介に対し亜紀子の胸には何んの侵蝕も残ってはいない。それを知った渋介は「相手からの拒絶に依って、生まれて始めて絶望を知った」とのべている。

亜紀子は愛する猪俣を思い諦めて絵の修業に励もうと決心した時こんな風に考へる。

この二人がかゝわり合う男女つまり四人が織りなす愛の形が描かれているのだが、多加子が心ひかゝる猪俣と言う藤うつなインテリが死んだ友人の妻亜紀子と現れて来る。

実はこの二人がこの中で一番愛し合っているのだが、結ばれることはない。

そして猪俣は自分の家を訪ねた多加子に衝動的に接吻することがあるが、それは猪俣に多少の責任感を感じさせはするが、恋愛感情とは別のものである。

「猪俣と自分の間には おそらく何年交際していても何にも起りはしないに違いない。神様が二人に新しい運命を与えることに不賛成だったのであろう」とこの愛が結ばれないことに依る愛の純粋さが保障されるとでもいったらいゝのであろうか。

花嫁に逃げられた渋介も変なこだわりも見せず、悠然としているなど、現実ではとても考へることが出来ないし、周囲の迷惑などもまるで考えてはいない非現実的な物語でありながら、そうした息苦しい回転をさけて展開してゆく所が美しく涼風の吹き抜ける思いがする。

登場人物も少なく、愚人もなく善人ばかりで、しかも人間のみにくさにも触れず、それでいて読者をひきつけるところが井上文学のたまらない魅力なのであろう。

それと作者の中に愛情の純粋さを求めつゞけるロマンティックな心に共鳴したいものを人間は心の中に常に気づかずに持っているからなのだという気がしてならない。

その中にこうした美しさだけの作品も心洗われる思いがして心に残っている。